

木の実・草の実・草の種

1 きれい!トッフ3

★輝く第1位は…コバノカモメツル!!

このように写真にしてみるとなかなか難しいもので、そのままでは地味でぼけた感じになってしまいそうです。そこで少しだけ加工してみました。白い種髪も袋果の中の種子もどちらもしっかり見ていただきたい、相矛盾した思いです。せめてと、大き目の写真にしてみました。

ともあれ、袋果が割れて種髪を付けた種子が、あとは風を待つだけ! そんな瞬間を捉えることができたように思います。

茂原公園の地下水位が高い場所では、同種がたくさん芽生えます。それでも管理作業で全草刈られてしまうので、一部を柵を設けて保護しています。夏から初秋に咲く星型であずき色の小さな花が、何かおとぎ話に出てくる小人たちのようで、なかなか可愛らしくて良い感じです。



★輝く第2、3位は…/ササゲ、ミスタマソウ!!



それぞれ11月、8月の茂原公園での様子です。

前者(左写真)は秋の野歩きの楽しみの代表格。この色合い、いわゆる『二色効果』の一つでしょうか。

後者は真夏の森歩きの楽しみの代表格。名前が表すとおり涼し気な姿。『水饅頭』を連想するのは筆者だけ?ともあれ、猛暑の夏、森の中は本当に涼しんです。

2 美味しい!トッフ3

★輝く第1位は…モミジイチゴ!!



何時の時代も、食べる人の年齢に関係なく、この地位は変わらないでしょう。

某サイトによれば、「伐採等による地表攪乱後に、埋土種子や動物によって散布された種子から発芽し成長する。個体が十分大きくなると(中略)、数年後には地下茎で結びついた巨大なクローンを形成する。こうして造林地等に卓越して優占する」そうです。温暖化の影響でしょうか、開花も実が熟すのも、20年以上前、幼かった娘たちと一緒に食べた頃より半月以上早くなっているように思います。

★輝く第2、3位は…イヌビワ、フユイチゴ!!



前者(左写真)は雌雄異株。イチジクの仲間で、雌株の熟した黒い実は甘くて美味しいです。イチジクの仲間特有の花の構造や虫との関係、そして分布など、色々と話題性の尽きない植物です。

後者は言うまでもなく、ヒトにとっても動物たちにとっても、初冬の森の貴重な存在。そしてこの話題としても欠かせません。

★輝くオマケは…ウグイスカグラ!!



6年ほど前、茂原公園を歩いていて、小尾根上の崖っぴちでようやく一株だけ見つけました。県内では北部にも南部にも分布しているのに、何故茂原公園には少ないのだろう?とっていたのですが、それからこれまでに保護した数は25株以上。全草除草で刈られてしまっていただけのことでした。早春の開花が楽しみです。

3 スゴイね!トッフ3

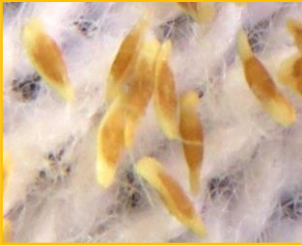
★輝く第1位は…ヤブミョウガ!!



ヤブミョウガは珍しくないと思いますが、茂原公園では数年前、半日陰の林縁で見つけ、それから保護柵を設置して4年ほど経ったのでしょうか、今では、3m四方ほどの保護柵内に40~50株ほどまでに増えました。どうやら繁殖力は旺盛のようです。ところが、他所では人の腰ほどまで育つのに、同公園ではやっと膝の高さほど。余ほど土壌環境に問題がありそうです。

ところで、写真(ピンボケ失礼)はヤブミョウガの種子、これが何だかスゴイ!!色々秘密がありそうです。詳細は話せば長いので、またそのうち。

★輝く第2、3位は… lindou, Fude Lindou!!



茂原公園での保全活動を通じて知ったことの一つが、リンドウが風散布であること。そして夥しい数の種子には翼が付いていて(左写真)、一つの大きさは2~3mmくらいでしょうか。

一方、フデリンドウは雨滴散布。野鳥のヒナが口を開けているみたい。写真は5月半ば茂原公園です。

4 縁起物!トッフ3

★輝く第1位は…十両(ヤブコウジ)

北海道南部(奥尻島)、本州、四国、九州に分布。県内では北部を中心とするスダジイ-ヤブコウジ群集の主要構成種。なお、県南ではスダジイ-ホソバカナワラビ群集がスダジイ林の中心となっています。茂原市内では、茂原公園は前者、市内南部の鶴枝ヒメハルゼミ発生地は後者となっています。

昨秋の茂原公園内で、赤い実がたくさん結実して見事でした(右写真)。これも何か良いことの兆しかも知れません。



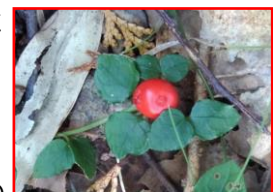
★輝く第2位は…有り通し(アリドオシ、オオアリドオシ) ※右下写真はアリドオシ(茂原市内5月中旬)

アリドオシ、オオアリドオシとも関東地方以西の常緑広葉樹林に生育します。茂原市内ではどちらも分布していますが、場所によって少しずつ違いが見られるようです。それぞれの森の生い立ちの違いかも知れません。それにしても、同じような地域、環境下で類似種が分布するのが不思議です。



★輝く第3位は…一両(ツルアリドオシ) ※右下写真

全国に分布。県内では古い神社などで見られます。昨夏、月山山麓のブナ林でも見かけました。花は2個ずつ咲くのですが、子房が合着していて赤い実の一つに見えます。よく見ると、2個の花の萼の痕が表面に残っているそうです。



★輝くオマケは…百両(カラタチバナ)、千両、万両

カラタチバナは茂原市内では少なく、センリョウは県内には分布せず栽培種の逸出個体が見られます。茂原公園では、照葉樹林の再生の試みとして『SDGsの森』を設定し、マンリョウ、ヤブコウジ、オオアリドオシなどを移植・保護し、順調に育っています。

新たな一年が、皆様にとって、千両も万両も(百両も十両も一両も)有り通しでありますように!

(記: 茂原市 望月力智)

千客万来のハゼノキ

ハゼノキはウルシ科の落葉樹で注目されるのは晩秋の紅葉期です。モミジやニシキギに負けない鮮やかな赤に色付きますから存在感は抜群です。自生のヤマハゼと実を利用するために中国から導入され主に九州で栽培されるハゼノキがあります。見分けは葉や葉柄の毛の有無でハゼノキは無毛でつるんとした感じだそうです。



ハゼの実を精製すると木蠟が取れて和蠟燭の他、化粧品などの素材となりますから、今でも一定の需要はあるものの、実を収穫する人手不足で増産できないようです。樹液に触れるとかぶれます。

野鳥にとっては油脂分が多く、冬向きの高カロリー食としても重要な木に違いありません。油脂分は種の表面を覆っているワックス層ですから実を丸呑みする鳥類でも利用でき、種は糞と共に排泄され散布されるので、樹木にもメリットがある訳です。

佐倉城址公園の茶室三溪亭近くにハゼノキ(ヤマハゼ?)が一本あって2021年秋には沢山の実が成りました。年が明けた2022年の1月にその木を見ると小鳥たちが実を啄みにやって来ていたので、その場に陣取って撮影する事にしました。その結果が下の7種8枚の写真です。

カメラを担いで動き回る必要なく、相手が入れ替わり立ち代わりやって来るので楽チンな事、この上ありません。特にルリビタキは薄暗い藪に潜んでいることが多いのに、こんなにも開放的な場所に出て来るとは驚きでした。それだけハゼノキは野鳥にとって魅力的な存在なのだと納得しました。



ツグミ



アカハラ



シロハラ



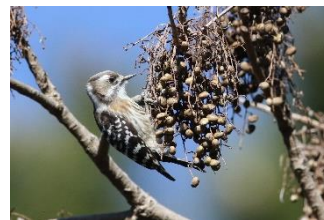
ジョウビタキ 雌



ルリビタキ 雄



ルリビタキ 雌



コゲラ



メジロ

当日は撮影できませんでしたが、シジュウカラ、ヤマガラ、キジバトなど食べている可能性があります。不思議に思ったのは木の実大好きなヒヨドリとムクドリが全然来なかった事です。ヒヨドリは何度もこの木の上を通過したのに、私が見ている間は食べに来ませんでした。真っ先に来ると思ったのに・・・

ところで、小鳥が食べる木の実は赤が多いと思われ勝ちです。鳥の色彩感覚は人間と同様で赤は目立つからとか、緑の葉との補色効果があると理由付けする解説する本もありますが、ハゼノキの実は地味な枯葉色です。

鳥は単純に赤い実に飛びつくのではなく栄養価の有るものを良く知っていて色に惑わされず利用しているのだらうと思います。赤い実の方が写真映えするのですが思い通りになりません。

佐倉市 坂本 文雄

ムシたちの面白写真/2023年

～おや?なるほど! そうだったのか!～

私にとって12月は、1年の振り返りと来年の計画をたてる月です。今年の印象に残った出来事と来年に向けた仕込みの状況を紹介します。写真が、ぶれているのは、私の緊張や興奮からくる体の揺れが、カメラに伝わっているからです。

<命の攻防 柿の実食堂に隣接する畑での出来事>

柿の実に集まる蝶を観察していた時でした。

おや? : 後ろを振り返ると耕された畑の中に緑色の大きなイモムシが、暴れていました。

なるほど: イモムシは、スズメガの幼虫でした。そしてこの幼虫にハエがしつこく付きまわっていました。ハエは、その顔つきから寄生バエの仲間とわかりました。

そうだったのか! : イモムシは、寄生バエの攻撃から身を守ろうと体を激しく動かしていたのでした。

なんと! : 寄生バエは、イモムシの抵抗に疲れたのか暫く攻撃を中断しました。そして再び飛び立ったその時に横から黒い影が出てきて、私の視界からハエが消えました。あたりを見回すとノシメトンボが捕食していました。

生き物たちの命の攻防を目の当たりした出来事でした。



ノシメトンボの口からハエの頭が転がり落ちてきました。

カメラのファインダー越しに寄生バエの「油断した、残念・・・」という声が聞こえてきました。

<ムシにとって手強い捕食者/私にとってライバル: 可愛い野鳥たち>

静寂につつまれた林の中で、突然、鳥のあわただしい動きに出会います。そんな時は、大抵大物を捕らえた時だと思っています。今年もシジュウカラが大物を捕らえた場面に出会いました。

ガサガサと揺れる下草からシジュウカラが、飛び出し枝に止まりました。嘴に大きな蛾（アケビコノハなどエグリバの仲間）をくわえていました。シジュウカラは、「どうだ?いいだろう!」と言わんばかりに獲物を見せてくれました。



蛾は逃れようと羽を激しく動かしていました。シジュウカラの周りに鱗粉や毛が舞っています。来年は、私が大物を先に見つけます! (笑)

＜来年に向けた仕込み：50年ぶりにカマキリの飼育方法の更新を開始＞

大草谷津田及び花島公園の観察会で、参加者から「カマキリの飼育方法を教えて欲しい」「生きた餌を探すのが大変、楽な方法がありますか?」「成虫まで何回脱皮するのか?」などカマキリについて多くの質問を受けました。私は、過去の飼育経験に基づいて回答するわけですが、記録を残していないので記憶に頼っています。そこで、交尾～産卵～孵化～羽化までのデータ(写真/記録など)を取ると同時に飼育方法の更新を行うことにしました。フィールドには、「オオカマキリ」「ハラビロカマキリ」「ムネアカハラビロカマキリ」「ココマキリ」が生息していますが、飼育スペースが小さくてすむ「ココマキリ」を飼育の対象としました。採集は、採集しやすい10月下旬から11月上旬に実施しました。採集したココマキリペアは、無事産卵に至りました。来春の孵化が楽しみです。

採集：10月下旬から11月上旬 朝晩の冷え込みが強くなると、アスファルトの道路に暖を求めるカマキリを多く見かけます。観察と採集のチャンスです。今年も多くのココマキリを見かけ、採集を忘れて色のバリエーションを愉しんでしまいました。



濃い褐色



淡い褐色



赤みを帯びた褐色



緑色

交尾：久しぶりの緑色型のココマキリとの出会いに興奮して採集を忘れていましたが、気を取り直して1ペアを採集しました。そして、交尾に至りました。

交尾成功の手順

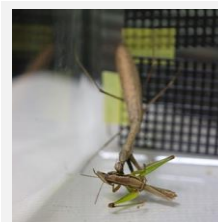
1. メスに餌を与える
2. 餌を食べているメスの後方にオスを置く
3. オスは、メスの背中に素早く乗る
4. 交尾成功(交尾の時間は長いですが、寝てしまい時間を計測できませんでした🥲)



飼育：飼育ケースの蓋に産卵することが多いこと及び卵の保管を考えて、飼育ケースを立てて使うことにしました。足場として上面と側面に、「鉢底ネット」をテープで貼り付けました。



飼育ケースを立てて使うと、高さもかせげます。さらに餌の供給、清掃など管理も行いやすいというメリットもあります。



エサは、イナゴ、オンブバッタ、ヤマトシジミを与えました。量は、1日に1~2匹です。肉ばかり食べるからでしょうか？水をよく飲みます。

産卵：2023年11月19日 産卵は、17時50分から始まり、20時45分に終了しました。飼育ケース上面に張り付けた鉢底ネットに産卵しています。卵は、飼育ケースから鉢底ネットごと取り出して保管しました。



17:53 開始



18:42



20:22



20:45 終了

西野孝法(千葉市)

記憶に残してほしい湧水のこと

松戸市は江戸川が流れ、北総台地の縁にあります。坂道・斜面が多いのも特徴になっています。斜面の縁にはハケの道が通じています。松戸駅から新京成線で一つ目の上本郷駅と常磐線の北松戸駅の間には結構な斜面と湧水があります。宮の下湧水は厳然と湧き出ています。

この付近は寺社が多く、初詣ツアーの企画として下見をしました。宮の下湧水は隣の小学校の放課後児童クラブが隣接しているため、小学生が、下見に来た我々を見つけて「何しに来たの？」と質問を浴びせてきました。「これこれ下見している」と伝えると、「湧水ならここから出ているよ」、「もう一つあるよ」と案内役をかって出してくれました。

一つ目の湧水は私たちが想定していた場所より奥に入ったほうでした。子どもがとらえた目の鋭さに「さすがによく知っている」とうれしくなりました。

さて、もう一つは普段はなかなか入ることはできないプールの奥にある湧水の元をたどることができました。ちよろちよろと流れ出している水の動きが見え、急斜面を見上げながら台地が含んだ水がまとまって湧水になっていることを感じました。左右二つの湧水がひとつになって坂川、江戸川につながっていることを改めて知り、自分が知っていることに加えて、湧水のまわりで遊びながら、地元のことを知り尽くし、何気なく伝えてくれたことが宝物のように思いました。

子どもたちは、学校は自分たちの庭だからすみからすみまで知っているよとでも言いたげでした。子どもたちにしてみれば、案内すること自体は当たり前のことなのだったのでしょう。そして、「ツアーの日が平日の昼間だったら案内できるよ」と、応対すること、大人とコミュニケーションする術をきちんと身に着けていることにちょっと感動しました。

この地域で低いところは標高6.6メートルで台地のうへは29.3メートル、低地と台地を昇り降りするには20メートル以上の標高差があり、地中にたまった水が湧水として出てくるという用意した説明が少しふくらんできました。

小学生に教えられたのは、下見の前に地形図、地図で読み解いてみましたが、住んでいる、通っていることでわかっている当たり前のことが、他所から来た人にはとても珍しかったり、新しかったりすることがとても多いということでした。

そして、もう一つの湧水は、ものの5分と離れていないカンスケ井戸です。湧水を利用したコイが泳ぐ池になっています。昔は斜面を昇り降りしながら生活用水として利用されていたことが立札から読み取れました。現在は階段が設えられていますが、かなりの急斜面でした。

松戸市が立てた立札には市内に残る湧水は枯渇しつつあり、湧水を守り、市民に公開していくことが明記されていました。

湧水の源を教えてくれた小学生が、湧水のことをいつまで記憶し続けてくれるか、かすかな期待を託したくなりました。(松戸市 藤田 隆)



カンスケ井戸